

新規がん患者100万人超

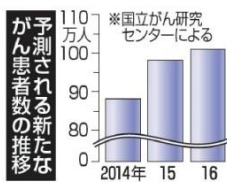
16年予測 高齢化で初の大台

国立がん研究センターは15日、2016年に新たにがんと診断される患者は101万2000人、がんで死亡する人は37万4千人になるとの予測を発表した。新規の患者が100万人を超えるのは初めてで、高齢者の増加に伴い、発症する人が増えるとみている。

死亡37万4000人

| 新規のがん患者数(人) | | 死亡数(人) | |
|-------------|---------|--------|---------|
| 男性 | 57万6100 | 男性 | 22万3000 |
| 前立腺 | 9万2600 | 肺癌 | 5万5200 |
| 胃 | 9万1300 | 大腸 | 3万1700 |
| 肺 | 9万600 | 大腸 | 2万7600 |
| 腸 | 8万4700 | 肝臓 | 1万8300 |
| 大肝臓 | 2万9000 | 膵臓 | 1万7100 |
| 女性 | 43万4100 | 女性 | 15万3700 |
| 乳房 | 9万 | 大腸 | 2万4000 |
| 大腸 | 6万2500 | 肺癌 | 2万2100 |
| 肺 | 4万3200 | 胃 | 1万6800 |
| 胃 | 4万2600 | 膵臓 | 1万6600 |
| 子宮 | 3万200 | 乳房 | 1万4000 |
| がん全体 | 101万200 | がん全体 | 37万4000 |

※国立がん研究センターによる



予測は、国や地域の一貫して増え続けているがん対策の目標設定などに役立つのが目的。患者数の予測は昨年より2万8千人増えた。実際の統計でも患者数は1970年代から9000人、肺がん(13万3千人)は昨年より1万6800人増え、大腸がんの14万7200人の実施状況によって患者数は予測と異なるとみている。

検診受診率の向上課題

2016年に新たにがんと診断される人が、国立がん研究センターの推計で100万人を超えた。がんは日本人の約2人に1人がかかると、死因も第1位の国民病。国は対策に本腰を入れるため、早期発見の鍵となる検診受診率の向上を図る。厚生労働省は17年度から始める第3次のがん対策推進基本計画の策定作業を進めている。07年に施行されたがん対策基本法に基づく

Q がんの統計 がん患者の実態を把握し、対策に役立つ統計データにするために1950年代から「地域がん登録」が進められた。国立がん研究センターは、これらで集められた75年から2012年までの統計を基に、年代や性別ごとに発症の傾向を割り出し、新規の患者数の予測を算出した。予測は、がん対策の目標を立てたり、将来、対策の効果を評価したりするのに使う。16年からは全ての患者の情報を集める「全国がん登録」が始まり、データの精度が高まると期待されている。

5カ年の基本計画では、75歳未満のがん死亡率を10年間で20%減らすことを目標とした。だが達成は困難との見通しを示され、急きよこ入れを図るため昨年、対策加速化プランを策定。予防「治療・研究」「共生」を柱とした。検診受診率は胃、肺、大腸、乳、子宮頸(けい)の各がんとも40%前後にとどまる。自治体間で受診率を比較する仕組みが未整備で、

①男性と女性のがん患者を多い順に3つ書きましょう。

男性 [] [] [] [] [] []

女性 [] [] [] [] [] []

②男性と女性の死亡者数の多いがんを多い順に3つ書きましょう。

男性 [] [] [] [] [] []

女性 [] [] [] [] [] []

年 組 名 前

(小学校高学年・中学校・高校 保健体育、保護者・教員)

2016年7月15日 朝刊